國學院大學学術情報リポジトリ

島根県雲南市飯石神社所蔵資料調査報告：國學院大學伝統文化リサーチセンター考古学調査報告

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002052

國學院大學伝統文化リサーチセンター考古学調査報告

島根県雲南市
飯石神社所蔵資料調査報告

2012

國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト

例　言

1．本報告は島根県雲南市三刀屋町多久和1070-8に鎮座する飯石神社の所蔵資料、および境内地の測量調査報告である。

2．この調査は平成21（2009）年９月19日（土）～同21日（月）に國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡にみるモノと心」プロジェクト（責任担当者：杉山林継）が実施した。調査にあたっては佐藤美彦宮司に多大なるご理解とご支援を頂戴し、飯石神社および関係者の方々に多大なるご協力をたまわった。

3．ここに報告する資料はすべて飯石神社に所蔵されている。調査図面については國學院大學伝統文化リサーチセンターにて保管している。

4．この現地調査には杉山林継（國學院大學伝統文化リサーチセンター長）、加藤元康（同ＰＤ研究員）、中村耕作（同助手）、平野哲也（同作業協力者、本学大学院生）が参加した。

5．この調査にあたり、調査指導をはじめ、島根県教育委員会から多大な協力を得た。

6．本報告は内川隆志（國學院大學伝統文化リサーチセンター准教授）、加藤里美（同講師）、松本岩雄（同客員教授）、錦田剛志（同共同研究員）の指導の下、新原佑典（同ＰＤ研究員）が編集し、実測図版作成は佐藤周平が、写真図版作成は新原が担当した。執筆者については文末に記載した。

7．調査、および本報告を作成するにあたり、以下の機関、諸氏よりご指導、ご協力賜った。記して感謝申し上げます（順不同、敬称略、所属は平成21年調査当時）。

佐藤美彦（飯石神社）、松本岩雄（島根県教育庁）、錦田剛志（島根県神社庁）、黒﨑寿政
西尾克己（島根県古代文化センター）、柳浦俊一、間野大丞（島根県埋蔵文化財調査センター）、
坂本諭司（雲南市教育委員会）
飯石神社、島根県教育庁、島根県古代文化センター、　島根県埋蔵文化財調査センター

目　次

第１章　調査に至る経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯 ……（新原佑典）　101
　第２節　調査の経過 ……（新原佑典）　101
第２章　飯石神社と周辺の概要
　第１節　飯石神社について ……（佐藤周平・朝倉一貴）　102
　第２節　飯石神社をめぐる地理的・歴史的環境 ……（佐藤周平・平野哲也・朝倉一貴）　103
　第３節　飯石神社の調査研究史 ……（新原佑典）　105
第３章　遺　物
　第１節　飯石神社所蔵資料 ……（新原佑典）　107
第４章　まとめ ……（新原佑典・平野哲也）　111
講演会記録「山のまつり、海のまつり」 ……（吉田恵二）　117

挿図目次

第１図　飯石神社境内測量図 …… 102
第２図　飯石神社周辺遺跡分布図 …… 104
第３図　飯石神社資料実測図（１）…… 108
第４図　飯石神社資料実測図（２）…… 109

写真図版

図版１　飯石神社全景・飯石神社御神体と幣殿・拝殿・飯石神社御神体近景 …… 113
図版２　飯石神社大場磐雄博士資料 …… 114
図版３　飯石神社資料 …… 115

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

國學院大学伝統文化リサーチセンター「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」は、平成19年度文部科学省オープンリサーチセンター整備事業に選定され、「祭祀遺跡」「神社祭礼」「学術資産」の３つの研究グループを組織して、調査研究活動を実施してきた。特に「祭祀遺跡に見るモノと心」研究グループでは、日本文化の基層を探るため、考古学を中心とした学際的な研究によって、祭祀遺物（「モノ」）やそれらが用いられた祭祀環境と、過去の人々の宗教文化・生活文化（「心」）を解明することを目指してきた。当グループは、当該研究分野の拠点となるべく、国内外の研究機関と連携しつつ、これまでの研究実績と膨大な祭祀関係資料を活かし、祭祀遺物から見た学際的研究、及び祭祀遺跡の景観研究を実施している。また平成21年度からは、島根県教育委員会、英国セインズベリー日本藝術研究所と研究協定を結び、外部機関との連携ならびに共同研究等の実施により、その深化に務めている。

対象地域のひとつとして、島根県出雲地域を取り上げ、律令制の成立と『出雲国風土記』が編纂された時期を核として、祭祀考古学研究を行なっている。また８世紀代とされる、出雲市青木遺跡などの神社遺構の成立をひとつの画期とし、「固定化した祭祀の場の成立」をテーマに設定し、これ以前の祭祀の様相を明らかにすることを目指している。これら調査研究の前提としてまず既知の祭祀遺跡、さらに島根全県遺跡の集成を行なった。その中で、神道考古学の鼻祖である大場磐雄が、全国の祭祀遺跡を概観する中で島根県においても、多くの神社境内地出土資料を調査し、報告していることから、神社境内出土資料の調査・研究を柱に位置付けることとした。

平成20年度には、松江市佐草町八重垣神社を対象として、鏡池をはじめとする境内出土の資料を調査し、併行して鏡池周辺の測量調査を実施した。その成果は『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第２号に報告した。

平成21年度は、『出雲国風土記』および『延喜式』神名帳に載る神社であり、磐を神体として本殿を有さず、古式を伝える神社として広く知られる雲南市飯石神社を調査することとした。飯石神社や境内からは、須恵器が出土したことによって、磐座の遺跡として周知されている。資料は、明治44（1911）年に神体である磐の下から出土したと伝えられ、資料化によって年代の位置づけを図り、飯石神社鎮座地における祭祀・信仰について検討することを目的とした。（新原佑典）

第２節　調査の経過

事前協議

平成21（2009）年６月13日に内川隆志（伝統文化リサーチセンター准教授）および加藤里美（伝統文化リサーチセンター講師）が錦田剛志（島根県神社庁・伝統文化リサーチセンター共同研究員）の仲介によって飯石神社を訪問し、佐藤美彦宮司と事前協議を行なった。協議では、当プロジェクトの趣旨と研究内容、調査の目的等について説明し、神社所蔵資料調査を行なうことに関して内諾を得て調査日程を決定した。佐藤宮司より、明治44年の遷宮の際に遺物が出土したことについての教示を得た。

調査

平成21年９月19日（土）から21日（月）にわたり、飯石神社で調査を実施した。まず調査に先立ってお祓いを受け、調査の無事を祈願した。社務所を作業場として拝借し、調査を実施した。調査内容は、台帳作成、実測・拓本・写真撮影であり、同時に神社の地理的位置を把握するために境内地および周辺の地形測量を行なった。（新原佑典）

第２章　飯石神社と周辺の概要

第１節　飯石神社について

（１）飯石神社由緒

式内神社　飯石神社（旧県社）
祭神　伊毘志都幣命
御神座　磐境式　間口4.2間、奥行３間
幣殿　大鳥造変態　間口1.2間、奥行1.6間
通殿　切妻造本破風造　間口2.3間、奥行1.7間
拝殿　入母屋造　間口５間、奥行２間
例祭　十一月四日
境内社　託和神社（吉備津彦命）
配祀神　誉田別命、足仲津彦命、息長足姫命

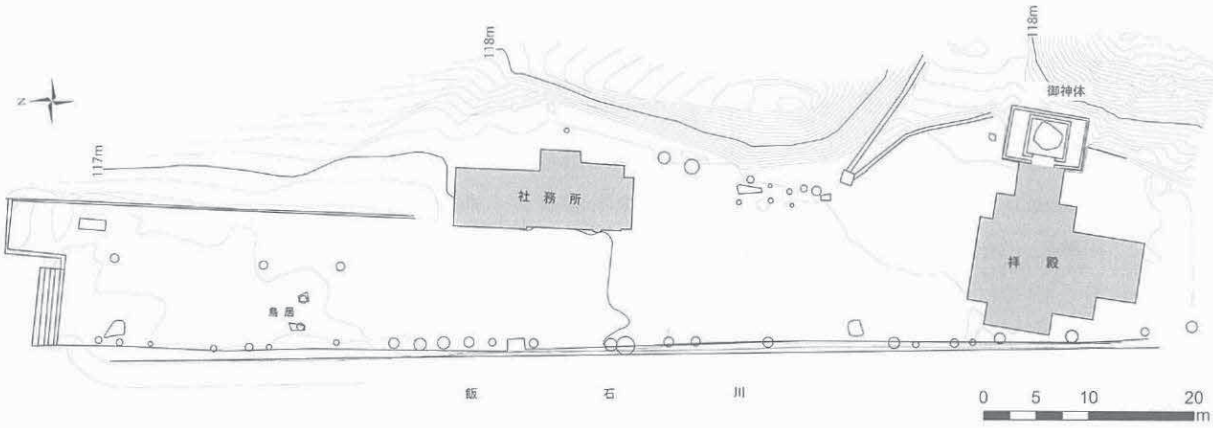
『出雲国風土記』に「飯石社」、『延喜式』神名帳に「飯石神社」と記される。『出雲国風土記』飯石郡条には「飯石と号くる所以は、飯石郷の中に伊毘志都幣命坐せり。故、飯石と云う」とあり、神の名が地名の起源として描かれ、またその神は「郡家の正東12里なり。故、伊鼻志と云う。神亀三年改飯石」としてこの地に鎮座したと記されている。

飯石神社は、磐を御神体として本殿を有さず、二重の瑞垣が廻る。このことは注連縄を用いないことと併せて、古式を残す形態であるとされる（前島 1980ほか）。

資料は明治44年の遷宮工事に際して出土したとされ、保管箱には「明治四十四年八月廿三日飯石神社遷宮工事ニ際シ廻ヨリ發掘セリ　社掌　佐藤美雄」と記され、現在も一括で保管されその来歴とともに資料が大切にされてきたことが窺われる。（佐藤周平）

（２）神社周辺の景観（第１図・図版１）

調査に併せて、神社および周辺の測量調査を実施した。測量範囲は飯石神社境内地であり、北側の参道階段から社殿までの南北約110m、飯石川護岸から、社殿東側斜面までの東西約30mの範囲で測量を行った。社殿は飯石川の東側の段丘面に位置している。神社境内地が位置する平坦面は、飯石川の護岸から約20mほどの幅があり、東側は高低差１～３ｍほどの斜面となっている。水準測量の結果、社殿北側の平坦面は約117mである。地形測量は神社境内地内に任意の基準点を設置し行った。（基準点は境内景観保全のために調査終了後撤去した。）観測に



第１図　飯石神社境内測量図

はトータルステーション（TOPCON GPT-3005W）を用いて地形の傾斜変換点を想定し座標値・標高値を測り行ない、遺構実測支援システムT3Di（PASCO）で観測データ処理後、ArcGIS（Ver9.3）3D Analyst で等高線を作成した。社殿等の建物も今回の測量で建物外周を測量した。社殿後方には小谷状の段丘の切れ目があり、その南北斜面の間がなだらか斜面となっており、斜面際には水路がある。磐座は社殿から見て西側斜面に接しており、平坦面からは約50cmほど高く石組みされた囲画内にある。斜面中腹の標高は約118mである。参道の階段から社殿まではおよそ80mあり、約23m地点に鳥居がある。社殿がある平坦面から飯石川側に約0.6m降りると幅２mほどの段状の平坦面がある。また御神体は南北2.48m、東西2.5m、高さ13.2mを測る。

周辺の基盤岩類は白亜紀火山岩類で主として黒雲母花崗岩又斑状雲母花崗岩・花崗閃緑岩である。神体磐も花崗岩質である。（朝倉一貴）

第２節　飯石神社をめぐる地理的・歴史的環境

（1）地理的環境

飯石神社は、雲南市三刀屋町多久和、飯石川右岸の川辺に鎮座する。雲南市は島根県東部、出雲地方の中央部に位置し、三刀屋町は旧飯石郡北東部にあり、北は出雲市、北東は大原郡加茂町、東は同郡の木次町、南は吉田村、西は掛合町・簸川郡佐田町に接する。町域東端を斐伊川が北流し、大原郡との境界をなす。その西を飯石川が北流し、掛合町から北東流してきた三刀屋川に合流し、三刀屋川は町域北東端で斐伊川に合流する。三刀屋川沿いに広島市と松江市を結ぶ国道54号が走り、北東部の下熊谷で広島県東城町を結ぶ国道314号と、また出雲市へ通じる主要地方道路である出雲－三刀屋線と交差するなど当地方における交通の要衝の地である。飯石神社境内遺跡は三刀屋町多久和、斐伊川水系三刀屋川の支流、飯石川右岸の段丘上に立地する。飯石神社御神体は標高446mの高瀬山の山裾を背後に鎮座し、拝殿はその西方に位置する。（朝倉一貴）

（2）歴史的環境（第２図）

遺跡は飯石川流域、飯石神社の鎮座する多久和地区に多く確認される。中心部の水田地帯には、縄文時代から奈良時代の遺物が散布し、西側山腹には古墳や横穴墓などがみられる。中世の遺跡としては、山城や砦跡、寺院跡が多い。製鉄遺跡は南より山間から谷間に散在している。

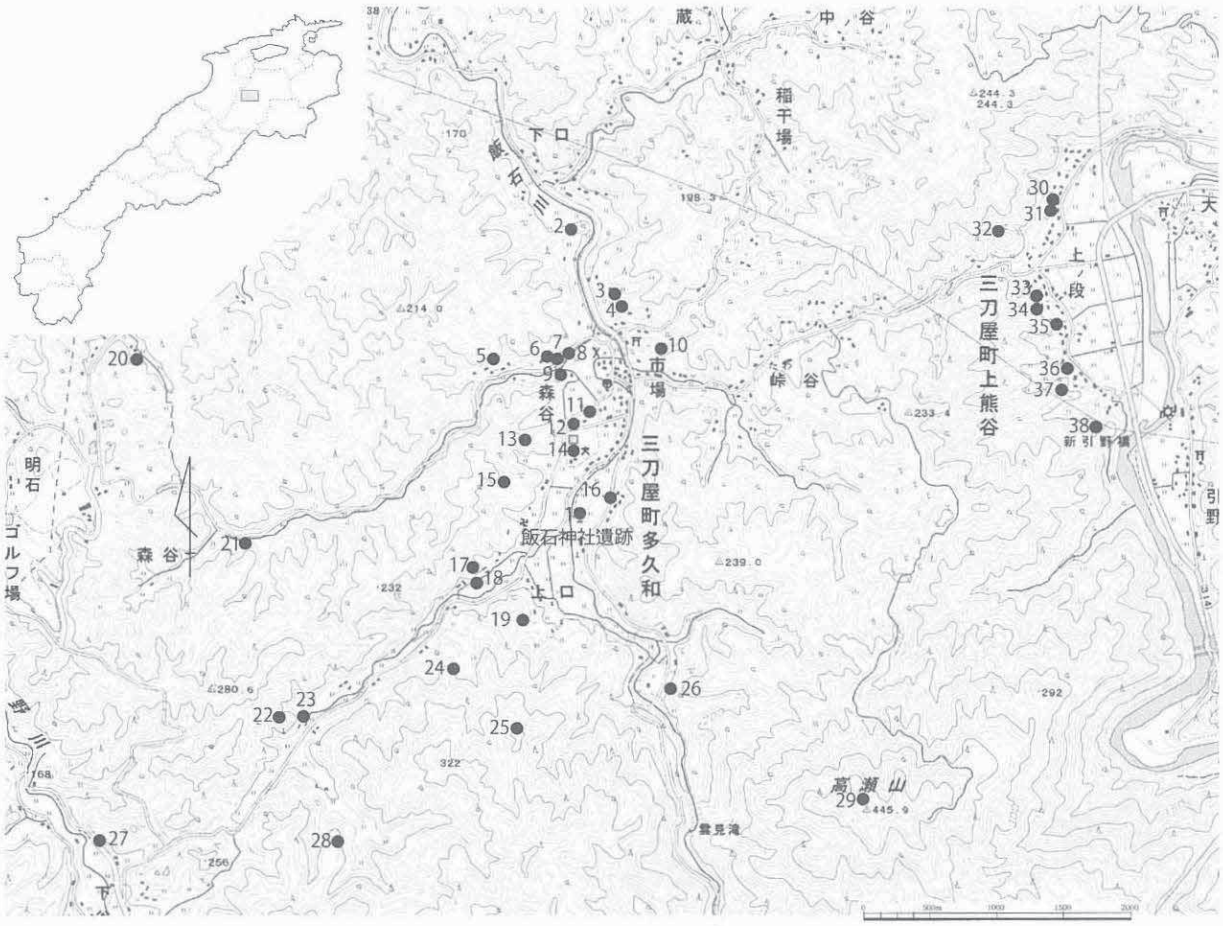
縄文時代～弥生時代

縄文時代の遺跡・遺物については、多久和地区に集中的に分布し、宮田遺跡（８）、京殿遺跡（11）、古殿遺跡（12）、などから縄文時代の遺物が出土している。県指定遺跡である宮田遺跡は、飯石川と森谷川の合流地点、河岸段丘上の縄文時代後期の遺跡である。乳幼児を埋葬したと考えられる埋甕２基は、縄文時代後期末から晩期とされる大形の土器を倒立して使用され、埋甕を囲むようにピットや立石を伴う。ほかに石皿や石斧、黒曜石の石鏃などが多量に出土していることから、飯石神社資料に含まれる石鏃や土器との関係が考えられる。

弥生時代の遺跡としては、宮田遺跡から弥生時代中期の柱穴跡や土器が検出されている。下熊谷にある要害遺跡からは、尾根の突端を壕によって切り離した、見張り台を思わせる遺構を検出しており、弥生時代前期から末期にかけての環濠集落の可能性がある。（平野哲也）

古墳時代

三刀屋町は、雲南地方の中では数多く古墳が分布している地域であり、飯石地区・中野地区に多く点在している。給下の松本古墳群は円墳・方墳からなる古墳群である。松本１号墳は全長約50mの前方後方墳で、後方部からは箱形木棺と割竹形木棺を内包する２つの粘土槨が確認されている。副葬品として斜縁獣帯鏡・刀子・槍鉋・鉄剣・刀子・ガラス玉などが出土している。また墳頂部には土師器の壺や高杯などが供献されていたと考えられ



1．飯石神社遺跡　2．清名五輪塔群　3．王神谷口遺跡　4．大神谷遺跡
5．森谷鈩移籍　6．森谷横穴群　7．森谷川遺跡　8．富田遺跡　9．託和神社跡　10．多久和城跡
11．京殿遺跡　12．古殿遺跡　13．古殿古墳　14．飯石小学校グランド遺跡　15．古殿今宮古墳
16．飯石神社上遺跡　17．端泉寺跡　18．上口遺跡　19．王正寺跡　20．札場道尾鈩跡　21．樋ノ谷鈩跡
22．福谷川原上城跡　23．福谷川原遺跡　24．湯舟鈩跡　25．福谷城跡　26．小原鈩跡
27．東下谷横穴群　28．中野杉谷の鈩跡群　29．高瀬山城跡　30．岩広古墳　31．岩広製鉄遺跡
32．上熊谷秋葉山城　33．上熊谷蛇山城跡　34．熊谷山経塚　35．林迫荒神古墓
36．善王寺横穴　37．善王寺跡　38．後の谷鈩跡

第２図　飯石神社周辺遺跡分布図

ている。１号墳の北にある３号墳は前方部が撥形に広がる古い様相を示しており、１号墳と併せて前期に遡るとされている。また１号墳の東に位置する４号墳は石室構造や出土品から７世紀代の築造と考えられ、松本古墳群は、古墳時代前期より終末期まで古墳が築造され続けた。また粟谷の城ノ尾下ノ段遺跡からは古墳時代前半期の甕やそれにともなう柱穴が検出されている。この地域では古墳時代中期の遺跡の調査例がほとんどなく、確認されている多くの古墳が後期に属している。上熊谷の岩広古墳（30）や松本４号墳は横穴式石室を持つことが知られている。岩広古墳は、墳形は不明であるが横穴式石室を主体部に持ち、副葬品は須恵器の蓋坏・提瓶や刀・刀子・鉄轡などの馬具もあり豊富である。築造は古墳時代後期から終末期と考えられている。中心部を西に張り出す丘陵の突端に位置する古殿今宮古墳（15）は、頂上に石が数個置かれている円墳である。未調査のため、内部主体を含め詳細は不明である。森谷入口部北側の急峻な山腹にある森谷横穴群（６）のＡ群1号穴からは須恵器蓋杯・杯・坩などの土器類のほか和鏡も出土し、古墳時代終末期とされる。三刀屋町では20群ほどの横穴墓が確認されている。中野の東下谷横穴群（27）では６基の横穴墓が発見され、須恵器・大刀・鉄器・玉類などが多数出土し、夫婦とその子どもの合葬とみられる人骨構成から家族墓と考えられている。なお森谷横穴群、東下谷横穴群ともに断面三角形の妻入りを呈するが、これは斐伊川中・上流域の奥出雲地方に広く分布するものである。

歴史時代

飯石郡の郡家は多禰郷に置かれた。飯石神社の東、飯石郡熊谷郷には軍団が置かれたと『出雲国風土記』に記載されている。熊谷軍団推定地は過去に何度か試掘調査が実施されたが、詳細は明らかではない。奈良・平安期には三刀屋地域においても多くの寺院が建立された。また中世には多久和の中心部である字市場を眼下にする低丘陵の端部には、多久和城跡（10）が築かれる。西前方へ下降する郭配置であり、東西150m南北120mの連郭式に近い構成である。郭は第１から第７郭あり、主郭の東後背部は深い堀によって切断区画している。また西最下段の第7郭には大手筋の城戸跡があり、縄張りの年代は16世紀を下るとされている。斐伊川沿いから多久和方面へ峠越し往還の入口部に対する構えで、ほぼ北に向かって張り出す丘陵上には上熊谷蛇山城跡（33）がある。主郭にはのちに一石一経塚（熊谷山経塚）（34）を造営している。さらに尾根筋を辿ると物見郭があり、荒神塚を祀っている（林迫荒神古墓）（35）。この城郭に関する口碑・文章等は見つかっていないが、多久和城と支城と考えられている。またほかに多久和から西へ中野掛合方面へと南吉田方面への往復の分岐する地点の尾根上に福谷城跡（25）などがある。また、古殿遺跡（12）では、建物の礎石と思われる自然石が多数出土し、同時に南宋伝来の青磁碗や白磁碗、銅製の飾金具などの遺物が見られた。鎌倉時代後半から南北朝時代のものと推定され、多久和城の城主との関係が注目された。（佐藤周平）

第３節　飯石神社の調査研究史

第１章でも述べたように、飯石神社境内からは明治44年に須恵器が出土し、多くの先学によって紹介され、磐座の祭祀遺跡として周知されてきた。ここでは主要な論考・記事を紐解きながら、現在までの位置付けを確認しておきたい。

飯石神社は神道考古学研究の中で大きく取り上げられ、大場磐雄は重要な資料として度々著作に取り上げている。管見の限り初出は1953年に刊行された秋田県の大湯環状列石の報告書に寄せた論考で、石にまつわる信仰について通史的に概観する中に飯石神社境内遺跡を紹介している。その後、神道考古学を体系化していく作業の中で祭祀遺跡を分類する際に、飯石神社御神体を「A　遺跡を主とするもの（祭祀の対象の明らかなもの）」のうち「1　自然物を対象とする遺蹟　山岳・巌石・樹木・湖沼池泉・海洋島嶼」における巌石を「高く聳立する『立石型』」と併せて「盤居する『飯石型』」と設定している。さらに「櫛岩窓神社小攷」にも盤石の例に飯石神社を第一に掲げ、ほか出雲市の多倍神社の首岩などを挙げている。また遺物論からは「祭祀遺物の考察」において須恵器を用いる遺跡として松江市八重垣神社とともに飯石神社を挙げている。大場は祭祀遺跡から神社への展開につ

いて考える資料として飯石神社を捉えていたようであり、いわゆる「原始型」の神社と評価している（大場1956）。國學院大學に所蔵される飯石神社関連資料は、図示した台紙に貼り付けられた紙焼き写真や「昭和５年３月23日　飯石神社」の注記を持つガラス乾板がある（國學院大學学術フロンティア事業実行委員会2005、國學院大學デジタルミュージアム http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/ にて公開中）。

大場以降は地域の研究者によって、飯石神社境内遺跡の位置付けが図られることとなる。鳥取・島根両県の祭祀遺跡を集成した近藤正によると、飯石神社遺跡について「島根県飯石郡三刀屋町飯石迫飯石神社本殿」として、出土遺物に「須恵器・子持高杯」を挙げている。子持高杯については今回の調査では確認することができなかった。前島己基は文献史料・民俗資料・考古資料から出雲地域における石にまつわる信仰について通史的に把握する論考を発表している。その中で飯石神社について「飯石郡三刀屋町多久和に所在する旧県社で、斐伊川からさらに支流の飯石川沿いに進んだ、狭小な谷間の奥に鎮座する。『風土記』に飯石社、『延喜式』に飯石神社とみえる古社で、さきにあげた『風土記』の五、六の記事に関連し、いまなおその伊毘志都幣命の降臨、鎮座されたと伝える一盤石を御霊代とするものである。すなわち長径2.7m、短径2.4m、高さ1.2mの背の丸い自然石を二重の玉垣で囲み、これを本殿そのものとして建物は設けず、直ちに通殿、拝殿を付す形態をとっている。御神体の霊石と同様な石の露頭が鬱蒼とした背後の山丘にもみられる。後に触れるところであるが、この境内地からかつて古墳時代の土器類が発見されている。なお、上流1.4キロの所には名勝雲見滝がある」と解説している。さらに考古資料について「飯石神社と同所にある遺跡で、明治44年の遷宮工事に際し、御霊代の本殿盤石のかたわら、境内の字迫から須恵器類が出土し、器種として高坏、蓋坏、壷などがみられる。（中略）出土状態など細かい点は、明らかでないが、立地等からみると、埋葬や集落関係のものとするより祭祀用の遺品として『風土記』にある伊毘志都幣命の天降り坐ましたと伝える盤石、すなわち当社の御霊代となっている石神にミテグラとして供えられたものが、のち近傍のこの地に埋納されたとみる方がよりふさわしいものと考えられる」と述べている。

島根県遺跡データベースによれば、飯石神社遺跡からは古墳時代終末期の須恵器が出土し、重富福太郎氏蔵とある。重富氏は周辺の資料を精力的に採集されていたようだが、詳細は不明である。

また周辺においては飯石神社の北約350mの地点に京殿遺跡、同じく北約650mの地点に宮田遺跡が所在し、ともに縄文時代の遺跡で、特に宮田遺跡は発掘調査によって倒立状態の埋甕や竪穴建物をはじめ、後期から晩期にかけての資料が出土しているが、飯石神社で見出された無文の土器は確認できなかった。京殿遺跡については圃場整備に伴う開削による偶発的な確認にとどまっている。　（新原佑典）

第3章　遺　物

第1節　飯石神社所蔵資料

飯石神社に所蔵されている資料は、須恵器、炻器、縄文土器、石器の総点数26点で、中世炻器については小片のため図化できなかった。

資料は、明治44（1911）年の遷宮に伴う工事に際して出土したとされ、保管箱には「明治四十四年八月廿三日飯石神社遷宮工事ニ際シ殖ヨリ發掘セリ　社掌　佐藤美雄」と記され、現在も一括して宮司宅に保管されており、その来歴と併せて、資料が大切にされてきたことが窺われる。

以下に資料の概要を報告する。

【1】高杯（第３図１、図版３）　低脚無蓋高杯。三角形透かしを１段２方向に持つ。ただし１条、縦方向に線状の切り込みを有する。杯部は緩やかに立ち上がる。脚部は端部がやや外傾しながら立ち上がる面を持つ。大谷分類のＡ５型に分類される。

【2】高杯（第３図２、図版３）　低脚無蓋高杯。透かしを１段２方向に持つ。脚部端部は①と同様、外傾しながら立ち上がる面を持つ。大谷分類のＡ５型に分類される。

【3】壷（第３図６、図版３）　短頸壷の口縁部から肩部の破片。頸部は垂直に立ち上がり、口縁端部でやや器厚が薄くなる。内面が火膨れにより膨張している。胎土は緻密で径1㎜程度の白色粒子を含む。焼成は良好で、暗灰色を呈する。

【4】壷（第３図10、図版３）　上部を欠しているが、壷、あるいははそうの底部になると考えられる。底径は6.0㎝を測り、ヘラ削りを行っている。外面ヘラ削り、内面ナデ調整。胎土は緻密で白色粒子を多く含む。焼成は良好で明青灰色を呈する。

【5】杯（第３図７）　蓋杯の蓋。口縁端部を欠失しているが、体部に幅６㎜程度の凹線が廻る。胎土は緻密で白色粒を含む。焼成は良好、色調は青灰色を呈する。

【6】杯（第３図３、図版３）　高台付杯の底部。高台部は裾開きになり、高台部の高さは１㎝を測る。胎土は緻密で、径１㎜程度の白色粒を含む。焼成は良好、色調は青灰色を呈す。

【7】杯身（第３図８、図版３）　蓋杯の杯身。受部の径は13㎝を測り、口縁部はやや内傾して立ち上がる。胎土は緻密で白色粒子を含む。焼成は良好で青灰色を呈する。

【8】杯（第３図４、図版３）　高台付杯の底部。高台部は裾開きになり、端部で屈曲する。高台部の高さは１㎝を測る。胎土は緻密で径１㎜程度の白色粒を含む。焼成は良好、青灰色の色調を呈する。

【9】杯（第３図９）　蓋杯の杯身。受部から口縁部への立ち上がりは短く、やや内傾する。

【10】高杯（第３図５）　高杯の杯部と脚部の接合部分の破片。胎土は緻密で１㎜程度の白色粒子をわずかに含む。焼成はやや不良で、全体に磨滅している。

【11】高杯（第３図11）　高杯と考えられる須恵器の破片。内外面轆轤回転によるナデ成形、口縁端部の器厚は薄くなる。胎土は緻密で、外面に白色粒を含む。焼成は良好、色調は青灰色を呈する。

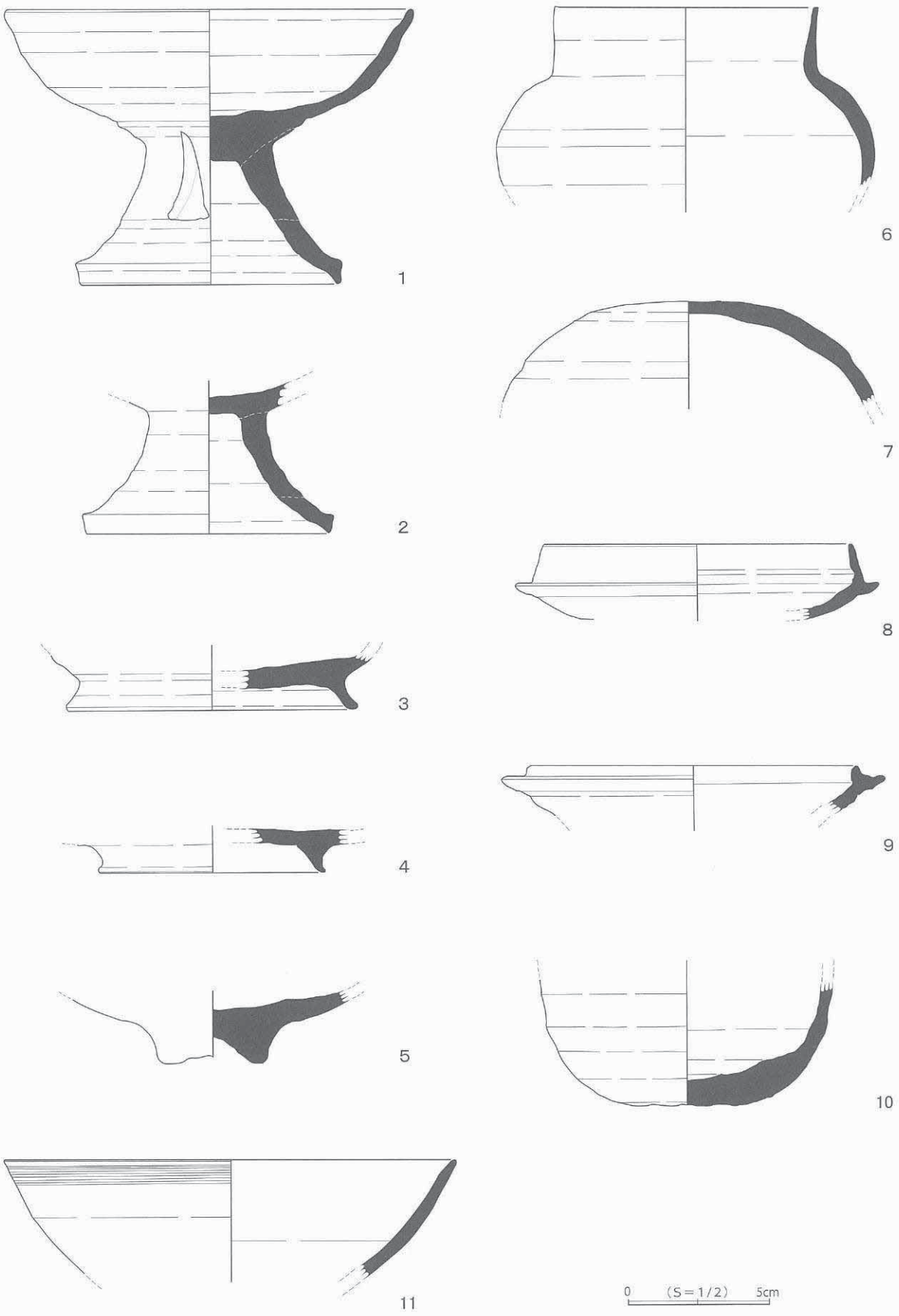
【12】甕（第４図12、図版３）　須恵器甕破片。青灰色を呈し、胎土は緻密であり、1㎜以下の微粒子を含む。焼成は良好である。内面に青海波文の当て具痕を持つ。

【13】甕（第４図13、図版３）　須恵器甕破片。淡灰色を呈し、胎土は緻密、１㎜未満の砂粒を含む。焼成は良好である。内面に青海波文の叩き目を有す。

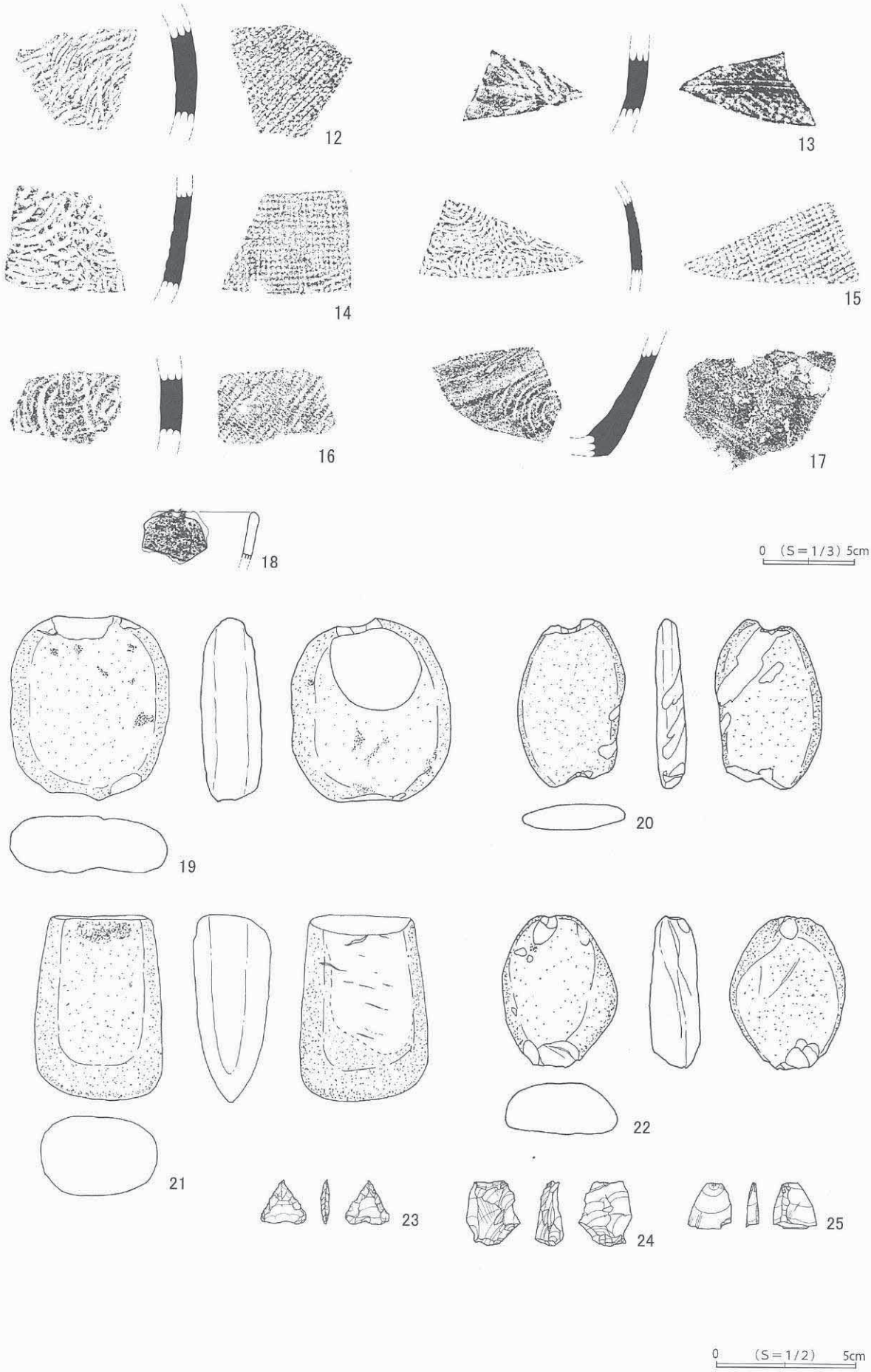
【14】甕（第４図14、図版３）　須恵器甕破片。暗灰褐色を呈し、胎土は緻密、１㎜程度の砂粒を含む。焼成は良好である。内面に青海波文の叩き目を有す。表面は鉄分が付着し黄褐色に変色している。

【15】甕（第４図15、図版３）　甕と考えられる須恵器の破片。胎土は緻密で焼成は良好、青灰色を呈する。外面には叩き目と２条の沈線、内面には当て具痕を持つ。

【16】甕（第４図16、図版３）　須恵器甕破片。色調は内面が淡灰褐色で鉄分が付着して黄褐色に変色し、外面は白灰色を呈する。胎土は密で、１㎜程度の砂粒を含む。焼成はやや良好、磨滅が強い。内面に青海波文の叩き目を有する。



第３図　飯石神社資料実測図（１）



第４図　飯石神社資料実測図（２）

【17】甕（第４図17、図版３）　須恵器甕の底部から胴部にかけての立ち上がり部分の破片。淡黄灰色を呈する。胎土は緻密で１㎜以下の微粒子を含む。焼成は良好。内面に青海波文の当て具痕を有する。

【18】縄文土器（第４図18）　縄文土器と考えられる口縁部の土器破片。無文であるが、口縁部に幅約5㎜の刻みを入れる。表面は明灰白色、裏面は暗灰白色を呈す。焼成はやや不良、長石・石英を多量に含む。

【19】磨製石斧（第４図21）　玄武岩と考えられる磨製石斧。表裏、および側面に平坦面を作るが、明確な磨りが認められるのは表面だけである。刃部は鋭利ではなく明瞭でない。

【20】石錘（第４図19）　扁平な川原石を利用した石錘。表面は上部、裏面は下部に剥離する。21の資料に比して明確な縄掛け部を持たないことから、未製品の可能性も考えられる。

【21】石錘（第４図20）　上下にくぼみを持つ石錘。扁平な川原石を利用し、上部を敲打することによってくぼみを作る。この加工にともない、くぼみ部分の両端に欠けが生じている。

【22】石錘（第４図22）　扁平な川原石を利用した石錘。上下に敲打による剥離を行うが、明確なくぼみにはなっていない。

【23】石鏃（第４図23、図版３）　玄武岩と考えられる石鏃。製作順序は明確ではないが、先端部から加工を行っているようである。

【24】スクレイパー（第４図24、図版３）　黒曜石の楔形を呈する石器。先端部が折損しているものの刃部に細かな調整を施す。

【25】剥片（第４図25、図版３）　黒曜石の剥片。

（新原佑典）

第４章　まとめ

調査した資料に基づいて飯石神社遺跡の性格の位置付けを図りたい。

明確に時期比定のできる資料は【１】・【２】の須恵器高杯、６・８の高台付杯、【８】・【９】の須恵器杯がある。【１】は脚部２方透かしで、杯部に稜や沈線を持たないタイプで、大谷分類の低脚無蓋高杯のＡ５型に、破片ではあるが【２】も同型に分類される。杯身【７】と【９】は口縁部の立ち上がりからそれぞれＡ３型、Ａ５型に位置づけられる。端部を欠失しているが、【５】の杯蓋もＡ５型に位置するものとすれば、出雲３期～４期、すなわちＴＫ43～ＴＫ209併行期に飯石神社境内遺跡のひとつの中心があると言える。このほか青海波文の当て具痕を持つ甕などと併せて、実年代としては６世紀後半～７世紀初頭と捉えておきたい。

また今回で、飯石神社資料には縄文時代晩期の土器が１点含まれていることから、周辺の遺跡で当該期の資料が存する宮田遺跡出土資料の追加調査を行なった。宮田遺跡の中心的な遺跡形成時期は、縄文時代中期末～後期前葉であり、晩期の資料は少量確認できるのみであった。したがって、飯石神社資料と宮田遺跡との関連性を伺うことができる資料は確認できなかった。

また飯石神社のある台地上、飯石川を50mほど遡る地点で遺物を採集することができる。表面採集された資料であり、飯石神社資料との関係は定かではないが、神社の周辺に遺跡が所在する可能も考えなければならないだろう。

（新原佑典・平野哲也）

参考文献

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会

大場磐雄 1956「神社と祭祀跡」『考古学講座』６（『祭祀遺蹟』に再録）

大場磐雄 1970「祭祀遺蹟の考察」「祭祀遺物の考察」『祭祀遺蹟』角川書店

倉橋清延 1983「飯石神社」『式内社調査報告』第21巻　出雲国（Ｂ）石見国・隠岐国　皇學館大學出版部

近藤　正 1972「山陰」『神道考古学講座』２　雄山閣

國學院大學学術フロンティア事業実行委員会 2005『大場磐雄博士写真資料目録』Ⅰ　國學院大學日本文化研究所

國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター 2010『大場磐雄博士資料目録』Ⅱ　國學院大學日本文化研究所

藤原　哲・秦　愛子 2004「出雲地域における窯跡出土の須恵器－大井古窯跡群における６世紀末～８世紀の資料を中心に－」『島根考古学会誌』第20・21集合併号　島根考古学会

前島己基 1980「出雲における石信仰－特にその始源的な様相について－」『季刊文化財』37

松本岩雄 1993「島根県」『古墳時代の祭祀』東日本埋蔵文化財研究会

三刀屋町教育委員会 1989『三刀屋町の遺跡　飯石・中野地区』詳細分布調査報告書２

山本　清 1960「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』島根大学

山本　清［監］1995『島根県の地名』平凡社

図版 1

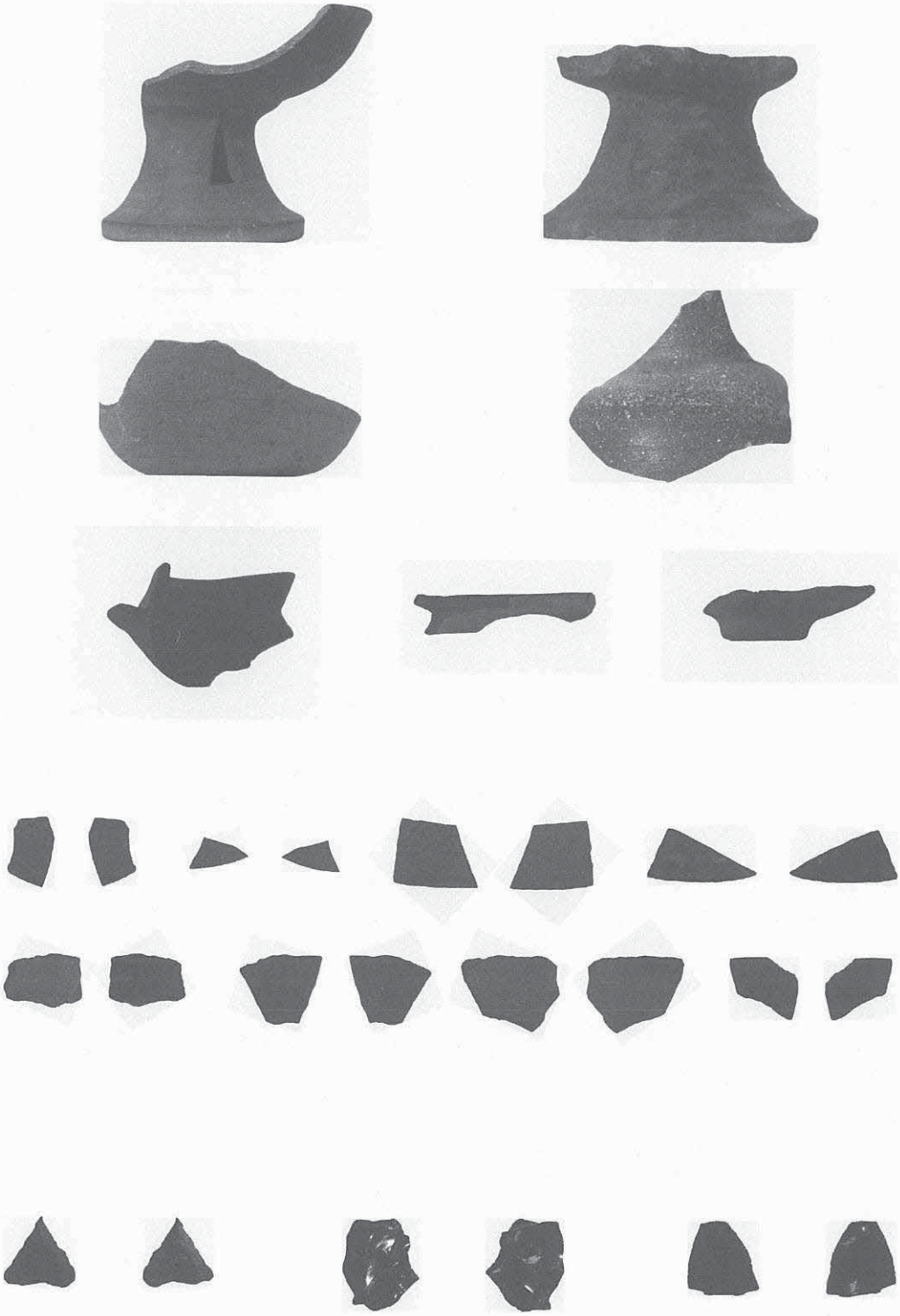
飯石神社全景
（南より）

飯石神社御神体と幣殿・拝殿

飯石神社御神体近景

図版２

飯石神社大場磐雄博士資料（Ⅳ－９－３）



飯石神社資料

講演会記録

山のまつり、海のまつり

吉田恵二

國學院大學の吉田と申します。私ども國學院大學と島根県教育委員会では、平成21年度より共同研究を進めてまいりました。その間本当に島根県の教育委員会、それから地元の皆様方に大変お世話になりましたことを改めて深くお礼申し上げます。この島根県には昨日参ったんですが、出雲空港に降り立ちますと大変な人でした。途中の道路もすごく車も渋滞しておりました。それではじめてわかったんですけど、11月５日がちょうど神迎祭であるという。今回お話させていただきますけれども、私が招かれざる神にならないように祈っております。

この島根県、出雲は神話の国であると同時に遺跡の宝庫でもあります。日本では明治維新以降、ヨーロッパの学問が盛んに取り入れられました。特に文部省百科全書という形で、色んな分野の新しい科学技術等が日本に紹介され、そのうちの１冊にarchaeology、昔の言葉ですから、古い物、古物学という訳で書かれております。以後日本では、考古学で様々な調査が全国的に行われております。とりわけ島根県は昔からものつくりの里として非常に有名であります。古くは京都大学の濱田耕作先生以下、様々な考古学の分野の方々が来られて調査をなされております。

一方私ども、國學院大學の考古学と島根県とのつながりといいますと、お手元の資料にも書いておきましたけれども、大正14年の鳥居龍蔵先生。この方は元々東京大学理学部の人類学教室におられ助教授まで昇進されたんですが、当時教授であった坪井正五郎先生、日本における考古学・人類学の草分けですが、その坪井正五郎先生がロシアのペテルスブルグで開かれた万国学士院会議出席中に死んじゃう。その後は当然のことながら鳥居龍蔵先生が東大の教授になられると思っていたところが色々ありまして、鳥居先生は東京大学に辞表を投げつけて上智大学と國學院大學の２つの大学で専任教授になる。それによって、國學院大學で考古学という学問が盛んに行われるようになっていきました。

その後、大場磐雄先生が、日本では非常に特殊な学問、おまつりを考古学的に解明しようとする、いわゆる神道考古学という学問を興されました。ヨーロッパではキリスト教の聖書を考古学的に研究しようという、聖書の考古学という学問がありました。日本では神道考古学、祭祀考古学という、これまた今のところ、日本にしかない特殊な分野として、祭祀遺跡の研究が始まります。

その後は杉山林継先生を中心に、日本文化研究所が中心になりまして島根県、特に出雲の様々な神社がお持ちの様々な遺物や古文書等の調査を行いました。こうした中で、考古学的に遺跡を調査しようという機運が高まってまいりました。その結果、お手元の資料にも書いておきましたけれども、平成21年４月に國學院大學と島根県教育委員会との間で共同研究をやろうじゃないか、という協定が成立しました。どこを調査するかということで、飯南町という所に琴引山という山がございまして、山中に大国主命の琴がある、という伝承をもつ山です。この調査を３年間続けてまいりました。この結果についてはまた後ほど、スライドでご報告いたします。本当にいい形をした山、いわゆる神様のいる山、これを神南備というふうに呼んでおりますけれども、神南備型をした本当に神々しい山で、山の天辺には非常に大きな石が散在している。これは花崗岩ですから、山の緑と花崗岩の白さ、本当に美しい山です。その山の頂上へ登りますと、遙か彼方に隠岐群島が見える。南の方はどうかといいますと、山の峰々が続きます。ですから祭祀、おまつりをやる場所としては絶好の場所だったんですが、残念ながら我々の力及ばず、遺物や祭祀の跡は、見つけることはできませんでした。この件についてまずお詫び申し上げます。

考古学といいますのは、残っている遺跡や遺物を発掘して研究するという学問であります。考古学の遺跡・遺物の中でも、残りやすいものと残りにくいものとがある。特に残りにくいものは有機物で出来た紙とか木とか食

べ物で、食べ物を盛った土器とかは残りますけども、中に盛りつけた食べ物はほとんど残りません。痕跡すら残らない。そういう意味で、考古学では何が一番難しいかといいますと、無かったということを証明するのが非常に難しい。あったかもわからないけど、腐って痕跡すら無くなる可能性もある。ということで、考古学というのは非常にけったいな学問なんですが、それはともかくとしまして、今日お話しさせていただきたいと思っておりますのは、日本でいつ頃からいわゆる祭祀、あるいは儀礼が考古学的に確認することができるかということです。

ヨーロッパでは今から約３万年ぐらい前の後期旧石器時代マドレーヌ期になりますと、スペインのアルタミラ洞窟などにもありますように、非常に美しい洞窟の絵画があります。これを、ある日親子連れの子供が見つけたんですが、なかなかそれが旧石器時代のものと認定されなかった。約１世紀後に、フランスの学者が旧石器時代のものだと、現在の世界で生きていない牛、動物が描かれているということでわかりました。それともうひとつヨーロッパで有名なのは、ヴィーナスといわれている人物像、地母神ともいわれております。これは石で作ったり、あるいは象牙で作ったり、要するに女性の身体を模したものもありますけれど、日本では旧石器時代の遺跡からそういったものはまったく見つかっておりません。といいますのは、日本とヨーロッパでは土の質が違うんです。何が違うか。ヨーロッパあるいは中国では北京原人なんかの骨が残ってましたが、ユーラシア大陸の土というのは基本的にアルカリ性です。アルカリ性の土だと、有機物、骨とかの有機物は比較的残りやすい。ところが日本は火山の列島ですから、火山灰と溶岩で列島ができている。ということは、日本列島は酸性なんです。酸性の土壌だと、有機物はすみやかに腐ってしまう。それで、なかなか日本では旧石器時代のものでは石器以外は見つかっていないというのが現状です。いかに旧石器時代の人といえども、真っ裸で生活していたわけじゃないんで、なんらかの着物を着ていたはずですが、そういうものはこういう理由で見つかっておりません。

日本でいわゆる祭祀に使われただろうといわれている遺物これが見つかるのが縄文時代になってからで、皆さんもよくご存じの土偶。それから、岩で作った岩偶。その他様々な特殊なもの。祭祀遺物とは何かという定義は難しいんですけども、端的にいいますと、実際の日常生活に必要ないものを概して祭祀遺物という。要するに何に使ったかわからない、というようなものを一般的に祭祀遺物と呼んでいますけれども、なかなかそういうものだけじゃないんですね。実際に出雲大社やお伊勢さんに現在も残っている様々な儀式。さらに、古代に書かれた様々な古文書があります。『日本書紀』とか『古事記』とか『続日本紀』とかそういうものと同時に、平安時代につくられた『延喜式』といわれるものがあります。律令というものがありますけれども、律令だけでは国家組織が大きくなりますとやっていられない。当然新しく法律がどんどん作られる。これを格式といいますが、この律令以降の格式を集めたもの、これは３つありますけども、その最後に出来たのが『延喜式』。『延喜式』の中には、これは平安時代ですけれども、当時の日本の色んな神社でどういうおまつりが開かれていたか。そのおまつりにどういうものが使われていたか。器銘、数量、容量まで書いてある。そういうものを見ますと、奈良時代や平安時代には大臣以下色んな役人がおりますけれども、彼らが日常の生活、あるいは宴会の時に使う食器と同じものを使っている。ですから、一般的に使われる土器その他のものといえども、おまつりに使わなかったということではないんです。

縄文時代に日本の原風景が作られますが、現在の日本の姿が作られたのは、基本的に弥生時代だと私は考えております。弥生時代になって米作りが始まる。青銅器が作られる。そして、青銅器を使った銅鐸とか銅剣とか銅矛とか様々な道具を使ったおまつりが行われる。これはおそらく、お米がたくさん取れるようにというような願いが多分にこめられていただろうと思います。その名残が、私は、現在もやられております新嘗祭ではないかと思います。新嘗祭といいますのは、その年獲れたお米のうち、一番最初に実ったもの、これを初穂と呼びますけども、これを神様に捧げて収穫のお礼をする。そのまま神様に捧げたものを食べちゃったら駄目なんですけど、それを保存しておいて翌年の種籾にしていく。弥生時代は約500年～600年間ありますけども、それをやっているうちにどんどんどんどん早稲の品種だけが残っていく。それ以外の品種は食べられちゃって残らない。もともと原始的な米は非常にたちの悪い性質を持っておりました。例えば、同じ時期に田植えをしたとする。種籾ごとに収穫の時期が違う。なおかつ困ったことに、熟したら穂が落ちてしまう。今の米はそんなことないですよね。一

斉に実ります。で、一斉に収穫が、稲刈りができます。今はほとんどコンバインになってしまいましたけど、一昔前までは、私の子供の頃は鎌で刈り取ってました。鎌で一斉に稲刈りができるというのは、同じ一枚の田んぼに植えたものが同じ時期に実るというのが大前提です。一つ一つの稲穂が違う性質を持っている。刈り取りの時期が遅れたら落ちてしまう、早いと実っていない、というような状態では、田んぼの中を見回って一本一本の穂の状態を確認して、収穫できるものだけを収穫する。そのために、弥生時代の収穫具としてはじめに出てくるのが石包丁という石で作ったナイフで、穂を一本ずつ刈り取っていく。熟したものだけを取る。ところが弥生時代の後期になりますと、石包丁はほとんど姿を消します。石で作った鎌、古墳時代になりますと、完璧に鉄で作った鎌が出てきます。石包丁が消えるということは、そういう１本１本収穫することはせず、もう根こそぎ刈り取ることができるということになった結果だろうと私は考えております。そういう意味では、日本のお米の品種改良に、弥生時代は非常に大きな役割を果たしていたと思います。以後今日まで、基本的に米作りの技術はそれほど変わっておりません。

このお米にまつわるおまつりの様々な道具、特に島根県では大量の青銅器が見つかっております。1970年代に銅剣と銅鐸が見つかった松江市の志谷奥遺跡ですか、ただあの頃は量も少なくて、まあよう見つかったなあくらいの感じでした。ところがその後、荒神谷、そして加茂岩倉遺跡が見つかりまして、もう大変なことになる。それはもう出雲王国を彷彿とさせるような大発見でした。

弥生時代のおまつりっていうのはそれほど複雑じゃない。おまつりが非常に複雑になってきますのは次の古墳時代で、古墳時代になりますと、いわゆる日常生活に使う様々な道具以外に、我々は小型粗製土器と呼んでおりますけれども、ちっちゃなちっちゃなミニチュアの茶碗とか、そういった食器が出てきます。こういったものを我々は一般的に祭祀遺物と呼んでおりますけれども、小型・ミニチュアの土器は、言葉が悪いんですけど、小汚い。一般的にロクロが出現すると、土器作りは男の仕事になる。ロクロが出現する以前は、土器作りは女の仕事というように言われています。日本で最初にロクロで土器を作ったのは須恵器という焼きものですが、それ以前の縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器などは女性が作る焼き物で、日常生活に使うもので、美しい。ところが小型粗製土器、ミニチュア土器といわれているものは本当に小汚い。多分、普段土器作りなんかしたことのない男が作ったと考えていますが、これを使っておまつりをしたと一般的に考えられておりますが、私がもし神様だとしたら、そんな小汚いもので食べ物を供えてほしくないと思うくらいの土器です。

さらに古墳時代になりますと、様々なものが古墳に入れられるようになる。そもそも弥生時代には九州の墓に特に大量に入れられていました。ところで、邪馬台国がどこにあったかというのはいまだに議論があるところですが、邪馬台国のひとつの有力な候補地として考えられている畿内の弥生時代のお墓って本当に貧弱です。鏡なんかほとんど出ません。そういう意味でいいますと、弥生時代に最も力を持っていたのは北九州だろうと私は考えておりますが、そういった鏡が古墳時代になりますと、全国的に出るようになる。こちら雲南市では神原神社古墳から「景初三年」という、魏の国の年号を刻みつけた鏡が出ております。

その三角縁神獣鏡は日本の古墳時代前期から出る鏡として非常に重要なんです。特に神原神社古墳から出た鏡、これに魏の国の年号が書いてあります。魏の国の年号が書いてあることの何が大事かといいますと、邪馬台国の女王卑弥呼が遣いを魏の国の都、現在の洛陽へ使いを遣わせて帰ってくる時に様々なお土産をもらって帰ってくる。そのリストが『魏志倭人伝』に出てきますが、そのお土産のリストの一つに、銅鏡百枚というのがある。まさにその年号とぴたっと合う。そういう意味では、邪馬台国がどこにあったかということを考えるときに、非常に大事なのがこの三角縁神獣鏡といわれるタイプの鏡なんです。

特に古墳時代になりますと、鉄の技術が非常に栄えるようになる。昨日私も出雲大社のすぐ横の古代出雲歴史博物館で企画展を見せていただきました。こちらは鉄の製作が非常に進んだ地域です。そういった鉄で様々なものを作る。そういったものを古墳に納めるだけじゃなくて、おまつりに使う場合、特にいいものが奉納されていたのが玄界灘に浮かぶ福岡県の沖ノ島です。この沖ノ島では、古墳時代から平安時代ぐらいまで延々とおまつりをやる。しかもここは宗像大社の奥の院で禁足地ですので、人を寄せ付けない。そのために、古墳時代以来おま

つりに使った様々な奉納品が多少錆びたりしてますけども、ほぼ原状に近い状態で残っている。中には、中国で作られた唐三彩といわれる非常に美しい焼き物もある。この唐三彩を真似て日本で作ったのが奈良三彩で、奈良の東大寺正倉院にいっぱい残っておりますが、そういった非常に貴重なものが沖ノ島に残っている。はるばる海を越えて中国へ渡る遣唐使船の航海安全を祈ったおまつりの跡だといわれております。さらに海の祭祀の一つ、東京の南の伊豆諸島の一つに式根島という小さな小さな島があります。かつて寅さんの映画「男はつらいよ」の舞台にもなった島です。ここにたまたま厚さ１m20cmぐらいの火山灰に埋もれて、おまつりをした姿がそのまま真空パックのようになった遺跡がある。吹之江遺跡といいます。ここでは様々なお茶碗や刀、鏡だけでなく、人頭大くらいの自然の石が３ヶ所ポンポンと置いてある。神様が寄ってくる依代として使われていたものでしょう。出雲にも多い岩を崇める磐座といわれるものがある。おそらくその磐座であろうと。なおかつその遺跡からは真正面に富士山が見え、立地的には非常にいい所です。本土からやってきた人たちが、望郷の念を込めて、あるいは様々な願いを込めてそこでおまつりをしたんじゃないかと思っております。それからもう一つ、伊勢湾の中に小さな、神の島と書く神島という島がある。これは三島由紀夫の「潮騒」という小説の舞台となった島です。その島に小さな神社があってその神社に奈良三彩の小さな壺が所蔵されております。これも、伊勢湾を通る船の安全を祈願して奉納されたものだろうと考えています。もうひとつ、カブトガニで有名な岡山県の笠岡市に、大飛島という砂浜の遺跡があります。砂浜の中から、当時日本では最高の焼き物とされた、緑釉陶器がごっそりと出ている。これもまた、遣唐使が絡んでいるのかどうかわかりませんけれども、瀬戸内海を通る船の安全を祈願して奉納されたものだろうと考えております。

一方、神様が宿る山として一般的に考えられているのは、いわゆる神南備という円錐形の形をした山で、これの特に大規模な遺跡が奈良県にあります。三輪山の麓に大神神社という神社があって、三輪山の神様が蛇になって女性のもとへ通うという、神話の中にも出てくる山なんです。この山の山頂に祭祀用小型模造土器と滑石で作った様々な道具が奉納されている。山の中腹には要所要所に石が鎮座している。現在は木製の垣で囲われておりますが、こういう磐座が残っている。これは民俗学で言われていることですが、山の神様は田の神様でもあるので、お米の豊作を願っておまつりが行われた可能性も孕んでいる。次に、栃木県の日光に男体山と呼ばれる非常にきれいな山がある。中禅寺湖の湖畔にある山で、この山のてっぺんにも様々な巨岩があって、その巨岩の間に様々な遺物が奉納されている。これも山のおまつりの一つでしょう。

そうすると、海と山以外ではおまつりはやらないのかというとそうでもありません。私がかつて発掘に携わっておりました平城京には碁盤の目のような道路が走っている。こういう道路の上で様々なおまつりをやっていました。今の道路と基本的に同じで、古代の道路は必ず排水用の側溝が両側にあるんです。そういう道路の側溝から遺物がいっぱい出てきます。特に多いのはお皿や壺で、これに鬼の顔を描いた墨書人面土器といわれるものがある。さらに、金の延べ棒が埋まっていたりもして、様々なおまつりがやられておりました。特に飛鳥時代以降になりますと、遣隋使が行ったり、隋から遣いが来たり、遣唐使が行ったり、唐から来たり、さらには新羅へ行ったりします。現在の中国の東北部には渤海という国があって、渤海へ行ったり渤海から遣いが来たりというように、大陸との交渉が非常に盛んになってくる。大陸との交渉が盛んになるとどうなるか。日本では仏教が６世紀に入ってきました。一番最初につくられたお寺が、蘇我氏が建てた飛鳥寺です。話は変わりますが、先ほど風土記の丘のすぐ近くの来美廃寺といわれるお寺の跡を見せていただきました。非常にいい場所にある。しかも聞きますと、８世紀の始めの造営じゃないかという。８世紀の始め頃となりますと、あそこに塔が二つあるんですね。基本的に塔はひとつ。ところが塔が二つというのは、天武天皇が建てた薬師寺、現在は平城にある薬師寺と区別するために、元薬師寺といわれておりますけれども、それがいちばん最初ですから、都以外の寺としては塔を二つ持つ寺としては非常に古い例じゃないかと私は見せていただきました。こういう仏教が朝鮮から入ってきます。さらに言うと中国では道の教えと書く道教といわれる信仰があります。老子や荘子を崇める教えであります。中国では漢の時代に道教が始まり、次の三国時代には道教思想に基づくものがお墓にいっぱい入れられます。その一つが買地券といわれるもので、どこの土地を買うかというと、あの世の土地を買うんです。中国では焼き物で

様々な家、屋敷、食べ物、あの世でこき使う召使たちをお墓に納めるんです。これを明るい器と書いて明器と呼ぶんですけれど、決して明るい所では使いません。地下のお墓でしか使わないのです。あくまでも死んでからのあの世でも現世と同じような生活がしたい。そういう願望で入れるんですが、家屋敷に食べ物、召使をお墓に入れてもあの世の土地が買えなかったら家屋敷が立たんという、こういうけったいな発想をするんです。で、そのためには何が必要か。あの世の神様、冥土の神様から、冥土の土地を買いましたという土地の証文をお墓に入れるんです。こういう買地券といわれるやり方には道教の影響が非常に大きく入ってるんです。残念ながら日本では買地券は今のところ二つしか見つかっておりません。一つは福岡県の大宰府の近くに宮ノ本という、奈良時代の火葬をしたお墓で、そこから鉛製の買地券が見つかっています。あとは平安時代に作られた瓦、焼き固める前の柔らかい瓦にヘラで文字を刻みつけたものが、岡山県の倉敷考古館に所蔵されております。そういう意味で、道教系の遺物というのは日本では非常に少ないんですが、無いことはないんです。道教では特殊な符号を使います。道教の符合と書いて道符というんですが、そういうものを書いたものが藤原京あたりから出てくる。だから道教も古代の日本の思想に影響を与えていたんじゃないかと考えております。

仏教や道教が入ってきますと、それぞれに崇める対象があります。仏教には元々仏像はありません。偶像を崇拝しませんが、仏教のシンボルは必要です。そのシンボルは何か。太陽、日輪です。平安時代に日本で描かれた絵巻物の中に過去現在因果経絵巻がある。ここには剣を持った子供が火のついた車輪を追っかけていく図があります。この火のついた車輪こそが太陽、日輪です。仏教がやがてインドの西ガンダーラに伝わります。ガンダーラのあたりには有名なアレクサンダー大王の東方遠征に伴ってギリシャの文化が大量に流入してきます。私は中国の西端にあるタクラマカン砂漠で一ヶ月ラクダに乗って調査したことがありますが、あのあたりにはまさにギリシャ彫刻そのものの遺物がいっぱい出てくる。ギリシャの影響が非常に強い。ですからギリシャ彫刻を含むヘレニズム文化と仏教とが合体して、はじめて仏像が誕生する。ガンダーラで作られた初期の仏像は完璧にギリシャ人の顔をしていますが、それが東方に行くほど東洋人の顔に変わってきます。それは別として、仏教で仏像が入ってくることによって日本の信仰にも大きな変化があったと思います。日本では元々森羅万象の自然現象に神様を見る。ところが古事記や日本書紀、あるいは出雲神話にある天照大神や須佐之男命など、神様が人間の姿で表現されるようになる。神道の成立と発展にかかわる難しい問題ではありますが、日本では飛鳥時代から奈良時代あたりに、日本古来のマツリに大きな変化があって、神々が人間の姿をしたものとして表現されるようになったんじゃないかと妄想をたくましくしています。

では、スライドに従って、簡単に紹介していただきまして終わりにしたいと思います。これは先ほど話しました奈良の三輪山で、山ノ神遺跡ともいわれております。これがこの三輪山の中腹にあります、磐座と呼ばれる神の依代で、これが遺跡から出てきた土製品といわれているものです。これなどはまだ出来のいい方で、本当に出来の悪い粗末なものがある。日常生活に使う土器は女性が作っているのに対し、こういうおまつりに使う土器は、何の技術も経験もない男性が作ったと私は妄想しております。下の二つは須恵器といわれているもので、これはド素人じゃできません。これはプロ集団がつくったものです。下の左が勾玉、右が玉で、穴が二つ空いているのは鏡の鈕を模したものです。いずれも滑石という柔らかい石で作ったものです。左側は子持勾玉といわれる非常に特殊なもの、右側が首飾りです。次は日光の男体山です。典型的な神南備型で、手前に映っているのが中禅寺湖です。この山の頂上に遺跡がある。かなり古い報告書から取ったものですので白黒で申し訳ございませんが、こういう岩と岩との間に奉納品が納められている。これは平安時代に作られた鏡ですから、日光の男体山のおまつりは平安時代に行われたおまつりです。次が静岡県にある洗田遺跡で、小型粗製土器というのがどういうものかというイメージが、おわかりになるかと思います。福島の建鉾山の一番上にあった実物の鏡と銅鏡、石で作った模造品です。奉納品には本来は実物を納めるのが正しくて、実物が無い場合に模造品を代用するというやり方がとられたと思います。次は千葉県から出土した鏡で、鏡の周囲に鈴を取り付けた鈴鏡といわれるタイプです。いわゆるシャーマンが使ったものといわれているタイプです。

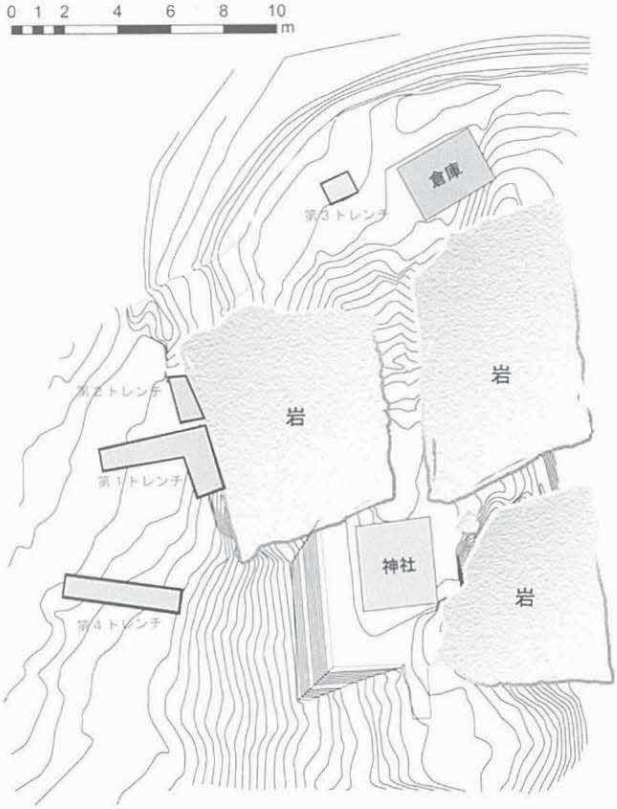
次が沖ノ島です。この島はくどいようですけども、千年以上人の立ち入りを拒んできた、神様の住む島ですの

で、遺跡が本当によく残っている。ここは戦後すぐに大調査が行われました。この白くなっている部分が岩で、岩が点々としている間に様々な奉納品が納められている。岩の上や岩の下、あるいは岩と岩との間ですが、こういう岩の上に奉納品を乗っけてしまう岩上祭祀と言います。この沖ノ島で見つかった様々な鏡のうち、内行花文鏡、方格規矩鏡。 内行花文鏡といわれるタイプは弥生時代の九州の甕棺からよく出てくるタイプの鏡です。それに対して、方格規矩鏡は古墳時代前期古墳から出てくることが多いものです。これは馬具の一種で、銅製金メッキのものです。日本では金メッキの技術は５世紀になって出てくるようになります。明治以後新しい技術がヨーロッパから入ってくるまでは、塗金のやり方は基本的に変わりません。塗金は銅にしかできません。鉄にダイレクトに塗金するのは無理です。水銀に金を溶かしますと、金アマルガムといわれる液体ができる。それを銅の表面に塗って加熱すると、水銀だけが蒸発してあとに残った金で金メッキができる。これは奈良の大仏さんもそうです。奈良の大仏さんの場合はもうとてつもない量ですので、あまり一般的には知られておりませんが、大量の人間が水銀中毒で死んだようです。この指輪は、私は中国製だろうと考えております。様々な紋様があります。この紋様の中に本来は宝石を嵌め込みます。嵌めこまれた宝石は無くなっておりますけれど、宝石が嵌め込まれた状態で出てきたらものすごいもんだろうと思います。これは龍頭で、これも金メッキされております。この龍のちょうど口のあたりから額の方へ流れるような線が描かれています。こういう装飾を施すのは中国です。遣唐使さんが中国から持ってきたものかもしれません。これは琴です。日本では弥生時代に琴だろうといわれている木製品が出てきます。縄文時代の末期にもあるんですけど、おそらくいい音はしなかったと思います。弥生時代になって、琴といわれる弦楽器が出てきますが、これは本当に精巧なもののミニチュアです。これは織物をつくる高機といわれるものです。銅で作ったミニチュアですけども、現在も使われている織物の機と基本的に構造は変わっておりません。非常に進んだものです。これは日本で作られた奈良三彩の小壺。小さなものですが、白と緑と赤の三色に塗られている。この唐三彩は奈良市の大安寺というお寺で見つかったものです。平城京にあった大安寺というお寺には、長い間中国の唐に留学していたお坊さんで道慈という方がいらっしゃった。そのお寺跡から大量の唐三彩が出た。だからこの道慈さんが、唐から留学を終えて帰って来られるときに持って帰ってきたものだろうと思います。これは滑石で作った様々な石製品で、馬の形をしたもの、子持勾玉、勾玉、普通の玉などがあります。中には船の形をしたものもあります。右側は馬です。これは特に奈良時代に多いもので、人形と呼ばれています。ほとんどが木製ですが、銅で作ったものもあって、『続日本紀』という記録の中に、銅の人、銅人という表現が出てきます。手足、顔が表現され、まさに人間の心臓にあたるとこに鉄釘を打ち込んだ跡があるものがある。これが後に呪いの人形、藁人形に変わっていくと思います。金銅製の人形など、まさに足の踏み場も無いほど遺物が散乱している。次は私が調査した、東京都式根島の吹之江遺跡です。何箇所かに石がポンポンと置いてあって、須恵器の茶碗や上下ひっくり返された蓋が置いてあります。本来蓋なんですけど、上下ひっくり返して皿にして、そこに食べ物を置いていたんだろうと思います。奥のほうに見えるのが刀で、お茶碗と石に挟まっております。海辺の遺跡ですので完璧に錆びておりました。小刀とか、槍先なども同じで、海辺の遺跡の場合は潮風で簡単に錆びてしまいます。この真ん中にあるのっぺらぼうの鉄の円盤は、我々が鏡だろうと考えているものです。発掘が終わって現地にありがとうございましたのお礼を兼ねて報告に行ったところ、土地の人から「こんなん子供の頃からいっぱい落ちとった、それをぶん投げて、銭形平次ごっこをして遊んどった」という話を聞いたこともありました。これは伊豆大島の砂浜の遺跡、和泉浜C遺跡です。ここから金の延べ板、銀の延べ板、その他非常に高価なものが出ました。この場所は南から見ると富士山が遠くに見えるという場所です。大島の噴火後、その鎮静を願ったおまつりだったと思います。これは有名な群馬県の黒井峯という遺跡です。榛名山の噴火で完璧に村が埋没してそのまま残っていたため、火山灰を取り除くだけで遺跡がでます。こういう竪穴住居が点々とありまして、竪穴住居と住居を結ぶ小さな道路、庭や畑とかでは畝がそのままの姿で残っている。そういう道路の各所には玉類をまとめて埋めてあったという。これは道に関する村の中のおまつりで、そんなに高価なものは入っておりません。ごく普通に村人が手に入るようなものを使って、それでも心を込めておまつりをしていたという状況です。

いよいよ琴引山のお話をいたします。調査のために、毎日麓から山のてっぺんまで登りました。一日の作業が終わりますと、また麓に降りてくるという生活を続けておりました。特に大変だったのは高さや方位を測る測量機械を毎日担いで上がってまた担いで降りるという、幸い若い学生諸君たちが交代でやってくれましたんで助かりましたけれども、これは相当な重労働であります。写真ではちょっと写り悪いんですけど、遙か向こうが日本海で、天気がいいと隠岐島が見える。これは山のてっぺんにある神社の建物、祠です。そこに、こういう巨岩がいっぱいあって、石で作った階段がある。『出雲国風土記』や地域の伝承に様々な伝説が残っております。大国主命の琴が山中にあると。そういう意味では、文献史学と考古学が合体して調査ができる格好の場所です。なおかつ麓に、かつて山頂にあったお寺と宿坊が下へ降りたという言い伝えがありまして、そういうところには様々な伝承が残っているのではないかというので、民俗の調査も含めて、やらせていただきました。図中のトレンチという部分が、我々が掘った部分です。掘りましたけれども、出てきたのは日本酒の瓶と赤貝の缶詰の空き缶。毎年山のてっぺんの神社でおまつりがなされているようなので、その時のお下がり物でしょう。こういう非常に大きな巨岩の手前の平らな部分、ここがくさいというのでかなり念入りに掘ったんですけど、何も出てまいりませんでした。山の頂上ですから土の堆積が非常に浅いですから楽でしたけど、掘っても掘っても何も出ないというのはがっくりくるものです。このトレンチの断面の黒い色は炭化物、炭ですね、ですから焚火を焚いたのかあるいはおまつりで何か火を使うのかもしれませんけれども、その時の炭が地層状に残っている。ですからここでおまつりをやったことは間違いないんです。あとは同じような状況ですので、とにかく地山まで掘り下げました、ということしかご報告できません。発掘して何もなくてもやっぱり最低限測量したりあるいは図を作ったりという作業は必要ですので、そういう作業はやらせていただきました。地山っていうのは人間がまったく手をつけていない地面ですね。その上に自然堆積層といわれる様々な土、あるいは先程の炭が堆積している。その間に、すぐ近くにあります三瓶山の火山灰が挟まっているということでした。これが大国主命の琴に比定される、大神岩といわれる非常に巨大な石で、色んなものが奉納されていたんだろうと思いますけども、このど真ん中の岩の真下には溝があっ

第1図　琴引山

第2図　夫婦岩



第3図　琴弾山神社周辺平面図

て水が流れている。ですから色んな奉納物があったとしてもその水で麓に流れてしまって無くなってしまったんだろうと思います。これの左側が写真、右側がそれの実測図で、東西方向、南北方向、海抜高、という形で測量をさせていただきました。この平らな石が大国主命様がお弾きになった琴とされる石です。これは横から見た。これは測量機械を使って高さ、海抜高を測っているところ。もうひとつこの祠のある所のすぐ右に平らな場所がありました。そして地元の伝承では、42の宿坊があったというふうにいわれております。ここを試しに発掘しました。残念ながらここでも建物の痕跡は見つかりませんでした。ただし大々的に掘れば、見つかる可能性は残っている。これは頂上にあります宝篋印塔の残骸です。ここまで登りますと、遙か彼方に隠岐が見える。これは左側が現在の写真、この右側が明治の頃のおまつりの時の状況の写真。これは麓にありますお寺に所蔵されている、かつて山の上の宿坊にあったものといわれるもの、民俗班が調査しました。これが調査隊のメンバー全員です。10日間ほどですけども、おかげ様で相当な減量になってスマートになって東京へ帰ることができました。以上でご報告を終わります。ありがとうございました。

註）これは平成23（2011）年11月６日（日）に島根県職員会館で開催した公開講演会「出雲のまつりと信仰」の講演をもとに加筆修正したものです。紙幅の都合上、スライドは割愛しました。